第11回 文芸思潮 エッセイ賞 社会批評 佳作

「三つ子の魂百まで」の重要性

佐生綾子

以前妹の家へ行った際、「これ今読んでいるんだけど結構面白いよ」と紹介してくれた本が、『愛着障害』（岡田尊司著）だった。

その著者名を見て私は、「その人の本何冊か読んでる」と思わず言葉が出た。

まだ息子が小学生だった頃に、ゲームの子供達への影響に悩んだ際に読んだ『脳内汚染』で、もう一冊はその続編『脳内汚染からの脱出』だった。

『脳内汚染』は自分で買って読んだが、『脳内汚染からの脱出』は、『脳内汚染』の読者カードに「私は息子にテレビゲームの類を買い与えず小学校卒業までこぎつけた今、安堵感と達成感を感じています」と書いたのを、「脳内汚染からの脱出」に掲載したいとの連絡が来た時、私は承諾した。そして後日、「脳内汚染からの脱出」が出版社から送られてきた。その息子もアメリカ留学後二〇一五年に会社員になった。

「愛着障害」を読み始めて直ぐに、私はある記述にとても心を捉われた。

《抱っこという実に原始的な行為が、子どもが健全な成長を遂げるうえで非常に重要なのである。それは、子どもに心理的な影響だけでなく、生理的な影響さえ及ぼす。子どもの成長を促す成長ホルモンや神経成長因子、免疫力を高める物質、さらには、心の安定に寄与する神経ホルモンや神経伝達物質の分泌を活発にするのである。抱っこは、スキンシップという面と、『支え、守る』という面が合わさった行動である。よく抱っこされた子は、甘えん坊で一見弱々しく見えて、実のところ、強くたくましく育つ。その影響は、大人になってからも持続するほどである。（中略）六か月を過ぎるころから、子どもは母親をはっきりと見分け始める。ちょうど人見知りが始まるころだ。それは、愛着が本格的に形成され始めたことを意味している。生後六か月から一歳半くらいまでが、愛着形成にとって、もっとも重要な時期とされる。この『臨界期』と呼ばれる時期を過ぎると、愛着形成はスムーズにはいかなくなる。実際、二歳過ぎて養子になった子が、養母になかなか懐こうとしないということはよくある。また、臨界期に母親から離されたり、養育者が交替したりすると、愛着が傷を受けやすいのである。愛着がスムーズに形成されるために大事なことは、十分なスキンシップとともに、母親が子どもの欲求を感じとる感受性をもち、それに速やかに応じる応答性を備えていることである。子どもは、いつもそばで見守ってくれ、必要な助けを与えてくれる存在に対して特別な結びつきをもつようになるのだ。求めたら応えてくれるという関係が、愛着を育むうえでの基本なのである。この時期、母親はできるだけ子どもの近くにいて、子どもが求めたときに、すぐに応えられる状態にあることが望ましい。》

引用が長くなってしまったが、この部分を読んだだけで、私が日頃職場で感じている憂いが決定的となり、政府が推進している「女性が輝く社会」が「子供が将来輝けない社会」に繋がっているのではないか？　との私の危惧の念を強くした。

「待機児童をゼロにする」という政策も、私には「子供を母親からどんどん引き離す」政策と聞こえて来て、疑問を感じる日々だ。

目先の利益しか見ていない愚考としか思えず、その上出生率アップをも目標としていることにも矛盾を感じずにはいられない。

「子は宝」――確かにそうだと思うが、現実はそこからどんどん遠ざかっている我が国の現状に、悲しみを覚える。聖書の中に《あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです》と書かれているが、そうではないと思わされることも多々ある。

自分の身なりには十分気を使っていても、子供のことには全然気を使っていないのでは？　と感じる母親もいる。

「母性本能」の衰退を感じる。

新年度を迎え、新入園児を迎えた今、私の憂いは増す。〇、一歳のクラスを担当しているから余計なのだが、母親から引き離され、母親を求めて泣き叫ぶ子供を抱き、その悲しみに寄り添いながら、その子の将来が心配になってしまう。なぜ生まれて間もなくこんなストレスを受けなければならないのか、ただ母親が側にいてくれるだけで幸せなのにね。母親が迎えに来てその手に渡された瞬間の笑顔は格別だからわかる。

私はこの子達の言葉にできない気持ちに寄り添い伝えることに使命を感じるようになった。

「三つ子の魂百まで」について、明橋大二先生の著書『子

育てハッピーアドバイス2』の中で、《三歳までの子どもの脳の発達は著しく、この時期に、周囲からの愛情に包まれ、安心できる環境の中で育てられることは、とても大切なことです。（中略）三歳までにいちばん大切なことは、子どもに安心感を与え、自分はこの世の中に、生まれてきてよかったんだ、周りは自分を大切にしてくれるんだ。という、基本的信頼感、自己肯定感を育むことなのです。》の記述見つけ、「三つ子の魂百まで」が真実をついた素晴らしいことわざだと感じた。

検索している中で、「『三つ子の魂百までも』森へ行こう（心とからだと子育てと）」という親子遊び研究家・篠秀夫氏のブログに辿り着き、共感したので引用させていただく。

《『子どもの育ちに必要な人と人とのつながりの形』は年齢によっても変化します。三才頃までは『安心』と『ぬくもり』が絶対的に必要なので、そのようなものを与えることが出来るつながりが必要です。一般的にそのようなものを与えることができるのはお母さんだけです。保育園では、『安全』は与えることが出来ますが、『安心』を与えるのはなかなか困難だと思います。『ぬくもり』を与えるのはもっと困難でしょう。保育園の先生達はオンブしてくれませんから。また、『三つ子の魂百まで』ということわざを『三才児信仰』といって、古い迷信のような扱いで否定してしまう人がいっぱいいます。確かに『能力の発達』という点だけで見たら、別にお母さんと一緒でなくても何の問題もありません。普通に育ち、普通の社会人になるでしょう。でも、『感覚や心の育ち』という点で見たら、『三才までのお母さんとのつながり』は絶対的に必要なものです。三才までの子どもは、お母さんとの関わりを通して、『感覚や心の育ちの基礎』を作っているのです。そして、人はその感覚と心の延長上に自分の人生を築いていくのです。ですから、三才までにお母さんとしっかりとしたつながりを創ることが出来た子は、感覚においても心においても安定した人間に育つと思います。そういう意味では、『三つ子の魂百まで』は正しいのです。》

私自身、長男が二歳の頃、社会に出たい、働きたい、子どもと離れたい。そんな思いから託児所のある職場で働くことを試みた。しかし私を求めて泣く声の凄さに根負けし、断念した経緯がある。今思うと本当に良かったと思う。必死に泣いてくれた息子に感謝したい。

二〇一四年の六月八日の全国紙静岡版で、ゆめ・まち・ねっと代表渡部達也さんの寄稿にもとても共感した。「自らを律する力を育てる」の一部を引用させていただきたい。

《高名な精神科医は、こう解説をしてくれた。『日本で氾濫する様々な依存症。アルコール、ギャンブル、買い物、性、覚せい剤。幼少期の依存経験が不足したままの日本人の姿です』半世紀に及ぶ臨床から、こうした人の幼少期には共通点があるとも指摘する。『一口で言うと、母親に優しく育てられる機会に恵まれないまま、大きくなったということ。家庭の貧富の差などよりも、母親が優しかったかどうかの方が、決定的な意味を持つ』幼少期に親に優しく育てられると自律神経が育ち、性急な、あるいは感情的なしつけをされると自律性が育たないという。精神科医の逆説的な示唆は、反社会的な行動をする若者たちと出会い、その幼少期に欲した依存体験を求めてさまよう姿なのかもしれない。》とても心に沁みた内容だった。

私は二〇一四年の五月に子供達とアメリカへ行き「アーミッシュ」に会った。「アーミッシュ」とは、《現代社会を象徴する米国に住み、その文明の恩恵を拒み絶対平和主義を貫き、権威や偶像を認めず、家族や隣人との絆の中に生きる敬虔なキリスト教徒》（『アーミッシュもう一つのアメリカ』菅原千代志著）この本を何年も前に読んでから、実際に会ってみたい夢が叶い、《家族の絆を何より大切にし、人間関係を損なうと考えられる現代文明を拒否する。自然と共存しながら手作りの道具で暮らすアーミッシュの人々のシンプルな生活には、私達が失ってしまった穏やかで豊かな人間性が感じられる》と前述の本にあった通り、私も感じた。教育も自分達のコミュニティー内で行い、社会保障も享受せず生きる人々の凛とした姿を実際見て感動した。アーミッシュは車の所持は許可されないが、乗ることは許可されていて、バスに同乗する機会に恵まれた。数人の若い女性の中に一人の赤ちゃん。女性の赤ちゃんを慈しむ様子と赤ちゃんの澄んだ大きな青い目の輝きは今も私の頭から離れない。「子は宝」とのオーラを感じた。

私達は、経済至上主義の中で、大切な物を沢山失っていることに、もっと真剣に目を向けなければならないと思う。

最近亡くなられた童話作家松谷みよ子さんの言葉「真実から目を離さない」を病院の待合室のテレビで知り、私もそうありたいと思った。

佐生綾子
さしょう　りょうこ
1966　東京生まれ
宮城県泉高等学校卒業後上京
様々な仕事を経験
現在静岡県下田市在住
保育士補助をしながら地元紙他への投稿生活を続けている。